手話歌について

世間で広まっている、いわゆる手話歌はすでに出てきた歌謡や民謡などの歌詞に手話単語を当てはめて歌われることが多い。特に拍をもとにして、ピアノ、ギターなどの楽器の音に合わせて歌うものがほとんどだ。聴者たちはメロディや音程などに合わせて歌う。また、楽器の音と発声などを織り交ぜた曲では音の節（メロディ）や調子・律動（リズム）などを嗜むことができる。でも手話の場合はそれらに合わせることは難しい。その理由に次のことが考えられる。

①日本語の歌詞に合わせて手話単語を並べただけで何を言おうとしているのか分かりづらい。（決まった音源に合わせた日本語の音声と手話の手型が噛み合わないことが多い）
②音源にあるメロディや高低などと手話表現との一体感が感じられないことが多い。
③音に日本語を合わせたものや日本語の音声の韻を踏んだものなどの場合は手話だと単なる説明で終わる。歌ではなく、お話を聞いているようなものになってしまう。

上の③の例として【図1】の「春が来た」（高野辰之）を挙げる。その歌詞をローマ字表記したのが【図2】。

【図1】

1番目

春が来た　春が来た　どこに来た
山に来た　里に来た　野にも来た

2番目

花が咲く　花が咲く　どこに咲く
山に咲く　里に咲く　野にも咲く

3番目

鳥がなく　鳥がなく　鳥がなく
山でなく　里でなく　野でもなく

【図2】

HARU GA KITA　HARU GA KITA　DOKO NI KITA
YAMA NI KITA　SATO NI KITA　NO NIMO KITA

HANA GA SAKU　HANA GA SAKU　DOKO NI SAKU
YAMA NI SAKU　SATO NI SAKU　NO NIMO SAKU

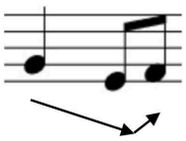
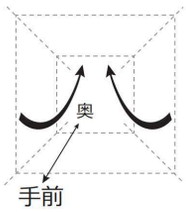
TORI GA NAKU　TORI GA NAKU　TORI GA NAKU
YAMA DE NAKU　SATO DE NAKU　NO DEMO NAKU

各節、同じメロディで歌われる。「来た」「咲く」「なく」が重なっていて脚韻を前提に作られている。加えて、頭韻も踏まれている。例えば1番なら「春・山・里」は同じ「ア」の母音の音（【図2】の「A」）。「どこ・野」は「オ」の母音の音（【図2】の紫色の「O」）を持っている。【図2】の色付き囲みのように、「I － A」と「A ― U」という音声日本語の脚韻も、楽曲の音も、心地いい繰り返しとして聞こえる人は捉える。そのため聴者は言葉だけではなく音としても楽しんでいる。

©育成×手話×芸術プロジェクト 2023

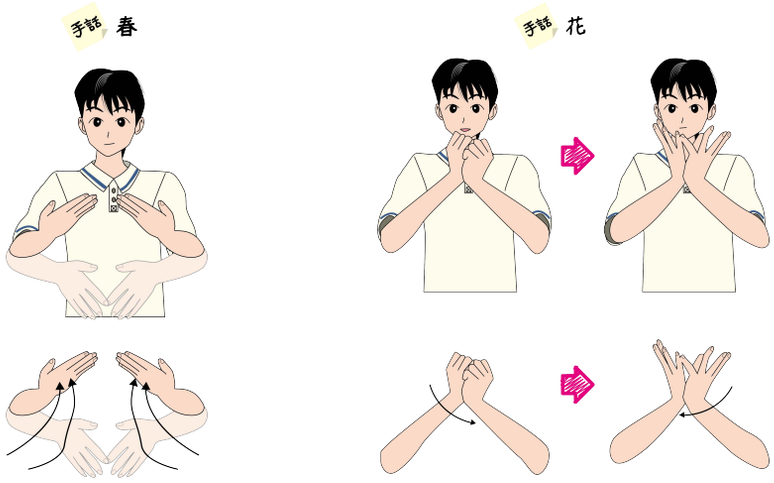
対してろう者・難聴者の視覚の捉え方は以下のふたつが考えられる。

Ⅰ.手話では例えば「春」を一つの手型で表すため、音で楽しむ意味で音韻に気づかない。
下の表は聴覚と視覚の捉え方の違いを表したもの。

	聴覚（音声・楽器）	視覚（手話）
言葉 （歌詞）	は　　る（が）	「春」という手話言語では手の動きの始点、動線、速度、終点全てが揃えて１セットになる。拍に合わせると動きの速度を変えることになり、意味も変わる
イメージ		
イメージの解説	音程が２度下がるが、すぐに「が」へ１度上がる。 「春が来た」は４拍で「は・るが・き・た」となって「るが」で１拍となっている	音程は一方的に流れる時間軸（拍・拍子）に沿って波のようにうねっていくイメージがある。対して手型は三次元的な動きが肝要であり、音程に合わせた動き（高い音ほど手を上に上げるなど）にすると手話言語として意味がなくなる

Ⅱ.手型としては「春」と「花」は以下のように違うため音楽的な繰り返しが始まる部分がわからない。

右のイラストのように手型が違うと視覚としての「韻」にはならない。また脚韻である「来た」「咲く」「なく」もそれぞれの手形も違い、見る側のろう者・難聴者は同じフレーズ（楽句）で歌っていることに気がつかない。



▸ろう者・難聴者自身が考えた歌詞による手話歌

ろう者・難聴者が中心の手話歌はある。手話歌の定義に聴覚的音楽が付いているとすれば、先に手話で歌詞（※1）を作って、楽器の演奏者が手話の動きを見ながら合わせて奏でるやり方がある。しかし、演奏者は手話をよく理解し、前衛音楽や即興音楽など既成の音楽に縛られないような方でないと難しいだろう。
またできた音楽の曲を固定したいのであれば、演奏者とタイミングやどこで合わせるかなどの約束を話し合い、確認することが大切だ。そして聴者、または音を判別できる人がカウンター（カウントマン）や引導役などを務めてろう者・難聴者たちの視野に立ってタイミングの合図を送るなどしてサポートすることもある。しかしろう者・難聴者はそのタイミングに合わせることに精一杯で感情的な表現をする余裕はないのかもしれない。じっくり時間をかけて繰り返し練習をしなければ、「歌う」よりも単なる語りのパフォーマンスのような表現になってしまう。

※1 手話で歌詞を作る時は手型の韻を工夫する。例えば「春」なら「暖かい」や「風」、そして少し難度であるが「（人々がこっちに）集まる」「（こっちに）響いてくる/影響される」など、名詞や動詞に関係なく手の形と動線が似たものを選んで手話の歌詞を作る。

©育成×手話×芸術プロジェクト 2023

▸ろう者のオンガクについて

チップシート 「オンガクの実践」で示したように、ろう者のオンガクは音に合わせる必要はない。目に見えるものの動きから感じ取ったり、自分の中で感じているものを奏でるように表現したりするものはオンガクになる。目で見て面白い、きれい、かっこいいと感じる映像やダンス、風景などがあるように手で表現する。
そこで手話言語で詩を綴るのではなく、手話のようで言語ではない表現が重点になる。例えば手話の手型を変形、誇張、デフォルメしたり、手話の言語性が認められる空間範囲（※2）をはみ出したりするなど非言語的な要素を多く使う。また、手話の手型と次々と表す手型とは脈絡がない綴りでフレーズとして作る。表現方法は下記の通り。

▶手話で文章のように作るのではなく、最初に出した手話の形から次の形に繋げるときの面白さ、美しさなどを見せる。その時のことばの意味は考えない。
▶手話の手型だけでなく、それを元にして形を変えてみる。
▶腕をいっぱい広げたり、手指を揺らめいたり、震えさせたりする。
▶ある形から別の形へ変わるときの流れの変化やスピードを工夫する。

などいろいろな表現がある。できたフレーズを繰り返し表現して気分や雰囲気を感じるようになる。また何人か輪になって一緒にやることもオンガク。その時はピッタリと同じ動きをしないといけないとは限らない。大事なことはみんな全体的に同じような雰囲気でやること。

※2 身体の下腹から頭頂よりやや上までの縦、肩幅より広めの幅、耳後ろから肘を軽く曲げて前に伸ばした奥行きの範囲

オンガクと手話歌の違い

オンガクと手話歌の違い
下記の通り大きな違いがある。そのため、ろう者・難聴者は目で見て、イメージし自分から表現するオンガクを磨いていくと良い。

▶音楽（聴者のコミュニティから発生）→音を使う音楽や日本語の発声などを基にしている
▶手話歌（聴覚的音楽を元にしたもの）　→ 音を使う音楽や日本語の発声などを基に手話の手形を当てはめている
▶オンガク（ろう者のコミュニティから発生）→ 音以外の要素を用いた非言語的表現や手話を基にしている

【MEMO】

©育成×手話×芸術プロジェクト 2023